林大だより

第 77 号　　平成 31 年 3 月 18 日　　長野県林業大学校翌桧会

第39回　卒　業　式

卒業にあたって

翌桧会　会長　南坂　博和

長野県林業大学校第三十九期の皆様そして、保護者の皆様ご卒業おめでとうございます。

卒業生の皆様は四月から、それぞれの選んだ場所で新たな一歩を踏み出すことでしょう。本年度は長野県林業大学校創立四十周年ということもあり、例年にない体験をすることが出来たと思います。初めてチャレンジした「第三回日本伐木チャンピオンシップ二〇一八」では、惜しくも世界大会出場は逃しましたが、林業現場で働く他の出場者と比べても遜色ない成績を残すことが出来ました。これからもいろいろな形で「林業」に関わっていくことと思いますが、「長野県林業大学校」で学んだことを生かしながら精一杯頑張ってください。

学生生活を離れ、社会に出ると「組織の一員」としての行動が必要になる場面が多くなり、「リスク管理」を行うことも重要になります。一つの小さなミスが、組織全体に影響を及ぼすこともあります。伐倒作業を例にすると、受け口や追い口が適切に作られていなかったり、障害物の整理が十分に行われていなかったりすると、伐倒方向が狂ったり退避が十分に出来なかったり……ちょっとした手抜きが大きな災害につながってしまうこともあります。林業現場では決められたルールなどを守らず、「やらなければいけないこと」をやらないで発生した労働災害が多くあります。特に「ベテラン」と呼ばれている方々にその傾向が見受けられます。授業ではしっかりやっていたことなのに、作業に慣れてくるとおざなりになってしまうことが多々あるからです。林業は昔から「3K産業」と言われていますが、このうちの「危険」は作業基準などをしっかりと守り、手抜きをせずに決められた手順で作業を行うことにより、そのリスクを減らすことが出来ます。

社会においても様々なルールや習慣があります。例えば「時間を守る」「上司にホウレンソウ（報告・連絡・相談）を必ず行う」「あいさつをする」などなど。面倒くさいかもしれませんが、決められたルールを守ることは、様々な「リスク」を軽減することにつながります。あまり難しく考えず、まずは朝一番に職場の先輩方に「おはようございます」と挨拶をすることから始めてみましょう。

最後になりますが、長野県林業大学校の職員皆様、先生方、そして私たち保護者に代り子ども達を温かく見守り支えていただいた地域の皆様方に、保護者を代表して感謝申し上げます。二年間ありがとうございました。

今日この頃思うこと

長野県林業大学校　校長　河合　広

初めて新入生と接した時、「おとなしい。山での仕事に耐えられるか、林業人になれるだろうか」と不安な気持ちを抱いたのですが、今では、自分の進路を真剣に考えたり、問題の解決のために、先輩の助言を求めたり、学生間で話し合ったり、解決策を検討するまでに成長してきました。夏頃まで、そう、二年生の進路が決まりだしてきたころから、一年生の行動もメリハリがついてきた気がします。特に、寮祭を終えたあたりからは、とても入学式で感じた気持ちは湧いてこないほどに。

新しい年になってからは、二年生のようになれるだろうか？という疑問符から、先輩となるために何をしなければいけないか、に変わった気がします。

二年生は二年生で、一年生が困らないようにしっかり引き継いでいけるようにしてます。

こうやって、学生達は、二年間という短い期間ではありますが、濃密な時間を過ごし、成長していくのだと、つくづく感じました。

こども達の成長は、接している時間が長いせいか、とても伝わってきます。鈍感な私がこうなのですから、逆に、感受性の強い学生達に、我々がどのように映っているのか気になりますが、この一年の経験は、私にとっても、日々成長をさせてくれたとてつもなく大きな時間に間違いはありません。

そして、今、一番気になることは、卒業式を校長としてしっかり執り行うことができるかであります。卒業生とは、たった一年間でありましたが、とても良い時間を過ごすことができました。心にのこる式辞をと、あれこれ考え始めたところですが、思いぐらすと筆が止まってしまい

ます。歴代の校長もこの壁を乗り越えてきたとは思うのですが、今の私には、このハードルがことのほか高く感じられます。

今日まで、そして明日から

長野県林務部　部長　山﨑　明

「平成」という時代が終わります。世の中が平穏に治まるという文字の願いとは裏腹に、大きな災害に間断なく襲われる時代となりました。また、この三十年間は、政治、経済、環境、技術等、あらゆる分野において変革の連続でした。地方の時代ともいわれながら、地方の時代はまだ具現化できていません。そんな中で、新たな時代に向けて、私たちの生き方そのものもあらためて考えるべき岐路に立っているのではと考えています。個々の知見を囲い込み、競争する時代から、皆で、知恵を出し合い、イノベーションを共創する時代を迎えたと私は考えています。地方にこそ、新しい時代を拓く資源があります。その先には「平成」が待っているのではとも思います。さて、皆さんにとっての「平成」とはどんな時代であったでしょうか。

森林・林業・木材産業においても、来年度は有史以来ともいえる大きな転換点を迎えます。森林所有者による適切な森林管理が限界をきたしている中、管理・経営主体を明確にする仕組みが、四月から「新たな森林管理システム」として立ち上がることとなりました。また、あわせて、こうした活動の財源として、森林環境税（仮称）を導入していくことが決定しました。この間、森林と人、森林と地域との関わりは随分希薄となってしまいました。こうした機会をとらえ、地域にとっての森林とは何かを皆で考え、持続的・循環的な利用を進めていく基礎を創る必要があります。

昨年、フィンランドのヨエンスーに行く機会に恵まれました。フィンランドでは、森林を幅広い用途に活かすよう、大学、企業、行政が協働で取組む仕組みがあり、林業分野が国内総生産（ＧＤＰ）の四％を占めていました。また、日本では人口減少社会に突入する中で、人手不足が顕在化しつつありますが、フィンランドは、そもそも人口が五五〇万人、日本の五％程度の人口でこうした成果を創出していました。彼らの特徴は、①グローバルな視野を持っていること、②チャレンジ精神が旺盛なこと、③協働意識が高いこと。これは、これからの社会、これからの生き方のヒントを得た思いで帰ってきたところです。

本年度は林業大学校にとって創立四十周年となる記念すべき年でした。森林組合や民間事業体、そして地域の人々等から、これまでの実績を評価するとともにさらなる活躍を期待する声を多数いただきました。今まで、長野県林業大学校が貫いてきた全人教育が効果を生み、評価されたものと大変嬉しく思います。一方で、社会を取り巻く環境は、日々変革の連続となってきています。こうした中にあっては、林業大学校も、良き伝統は維持しつつ、さらなる飛躍を図る節目を迎えていると思います。

後輩の皆さん、本校卒業生は、比較的協働意識が高いのではと思います。オーストリアでは、世界の今、を見たでしょう。地方に様々なイノベーションを共に創る時です。応援します。ファイト！

林大生に期待すること

木曽森林管理署　署長　林　茂

長野県林業大学校創立四十周年を迎えたこの年に、第二のふるさとともいうべきこの地に来られたこと、また、こうして寄稿の機会を得たことに感慨深いものを感じています。

さて、皆さんもご存じのように新年度は「新たな森林管理システム」の導入により、適切な経営管理ができない森林の経営管理を確保し、林業の成長産業化と森林の適切な管理の両立を図り、森林を循環的に利用しながら未来につなぐ復活の年です。いろいろなところで話題となり希望の船出となると信じているところです。

しかし、光があれば陰もあるように、喜んでばかりもいられないところを林大生だからこそ感じてほしい。長年の林業の衰退等により山を見てどうしようとか、こうすべきだと考え判断し行動する技術者、人材が森林・林業・木材産業に携わる職場で不足して

いるのが現状です。

皆さんの学んでいる長野県林業大学校の売りは、知識・技能教育に偏ることなく現場実践を通じて自ら行動する人を育てる全人教育だと今でも思っています。林業に関する知識のみならず寮生活を通じて感じたもの、得たものを如何に行動・実践に移し活かすか、その難しさや活かせた喜びを皆さんは二年という時間の中で考え経験し体得してきたのではないかと思います。

まさに、林業界はそうした林業に携わる熱意と感性を持った人材を欲しています。

社会に出ればいろいろな現場実態や周辺事情がありますし、森林・林業に対する価値観はその時代ごとに変化していきます。この変化等を感じとりながら、適切に管理された森林の循環利用という生業としての林業の原点に立ち返りどうすべきか、何が最良なのかを考え自ら行動することが必要です。

林大生には培った力を大いに発揮し活躍することを期待します。

学生のページ

あすなろの呟（つぶやき）

学校・寮生活から

小さな変化

1学年　一柳きくの

まだまだだと感じていた林大生活も気づけば半分が終わろうとしています。

林大で過ごした一年間の中で林業を学ぶ環境下、またそれらについて教えてくださる方々の存在はとても恵まれているのだと感じています。

今まで森や自然環境が一年をかけてどう変化するのかを観察し深く学ぶ機会がありませんでした。

しかし、長野林大に入学してからは同じ志を持つ先輩や同期と林大周辺の豊かな学習環境の中で、季節の移り変わりについてよく考えるようになりました。

毎日眺める星や山、木々は少しずつではありますが四季折々の変化があります。

そういった変化を発見したり観察するのが大好きになりました。

何度も巡り来る環境内でも小さな変化があるように私も少しずつ目標や将来に向けての変化をしなくてはいけないと思っています。この素敵な環境下で学ぶことを許してくれた親にも感謝をし、あと一年間ですが林大でたくさんのことを吸収していきたいと思っています。

10月　1学年　森林土壌学実習

一年を通じて

1学年　勝又　海斗

私は、林業大学校に入学して、一年間の学習を通して木の生態や加工の仕方などを学びました。どの科目も難しく、勉強しがいがありました。

木の生態は木を植えたらどのくらいの期間でどのくらい間伐作業をしなければならないか。どういった樹種が、どのような場所で生育が良くなったり、悪くなったりするかなどを学びました。木の加工では、木を切ってから製材するまでを習いました。そこで私は、木を板にする過程や方法などを学びました。高校時代にも林業の学習はしていましたが、本校は高校よりも学ぶべきことが多く、難しいです。しかし、しっかりと学習をしていれば林業に従事していく上で役に立つと思います。

来年度からは、これまで習った学習の応用が増えます。そのほかにも様々な技術講習や、資格取得が増え、林業にかかわる上で重要なことを学びます。一つ一つをしっかりと学び、これから先就職するところで生かしていければと思います。

10月　1学年　造林学実習

林大の一年間を振り返って

１学年
貞末　愛可

林大に入学して、もうすぐ一年が経ちます。長いようでとても短く感じる一年でした。

勉強面の振り返りは、専門の授業や一般の授業の中で難しいことがありましたが、それぞれの分野で詳しいひとに聞いて、少しでも理解しようと頑張りました。特に林業機械学で扱うチェーンソーは便利ですが危険なものなので、トップガン研修で様々なことを学べたことはよかったです。

生活面の振り返りは、実家を離れ、寮生活になり共同生活をすることに不安を感じていました。しかし、先輩が林大生活について優しく教えてくれたので段々と不安はなくなっていき楽しい林大生活を送っています。

そして大きな行事がいくつかありますがその中でも寮祭と三林大伐木選手権はとても印象的でした。

来年は二年生になり、主体となって行動しないといけないので不安ですが、協力し合って良い林大生活を送ろうと思いました。

心配だった寮生活

１学年
原田　桂吾

私が林大に入学して約一年が経ち様々な行事や授業がありました。その中で私の一番の思い出は寮生活です。ずっと実家暮らしだったので親元を離れての生活がうまくいくか心配でした。しかし入寮日とても緊張して来た私に先輩方は気さくに話しかけてくださいました。おかげで緊張がほぐれ良いスタートができました。入寮した初日部屋飯に連れて行ってくださり先輩との距離がぐっと縮まったように感じました。寮生活での一大イベントは寮祭でした。林内での伐木や展示などで地域の方々に林大のことを知ってもらういい機会だと思います。この寮祭を通してみんなで協力して完成させることの大切さを学びました。日ごろから廊下ですれ違う時でも挨拶をするため挨拶する習慣が身に付きました。今考えても寮生活、学校生活ともに先輩の存在はとても大きかったです。そんな先輩方もあと少しで卒業されてしまいます。四月からは自分が先輩になるので、今の先輩方のように自分も後輩に対して頼れる先輩でありたいです。

11月　１学年　森林地質学実習

林大生活一年間を振り返って

１学年
両角　和也

私が林大に入学して、あと一ヵ月で一年がたとうとしています。入学する前、初めての寮生活ということで先輩とはうまくやっていけるのかという不安がありましたが、入寮するときに明るく出迎えてくれた先輩の方々が優しく話しかけてくれたおかげで緊張がほぐれました。

この一年間を振り返ってみると、屋久島研修から始まり木望祭や駅伝などがありました。私がこの一年間一番印象に残っていることは屋久島研修です。今まで県外にあまり出たことがなく、あったとしても学校の修学旅行や遊びに行ったりするなど都会が多かったりと自然に関わることはあまりなかったため、興味を持ちました。屋久島で今でも覚えているのが縄文杉を目指して十時間登山をしたことです。目的地まで遠かったこともありきつい場面もありましたが、みんなで縄文杉をバックに写真を撮れたのでよかったです。

四月からは先輩となるので今の二年生に劣らない姿で林大生活を過ごしていきたいです。

11月　１学年　治山工学実習

卒業するにあたって

2学年
大畑　絵里

初めての寮生活と学年に女子が二人という不安を抱えて、林業大学校に入学しました。林業という少し変わった学校で、男子が多く、仲良くやっていけるか悩んでいたのも、今では毎日が楽しみに変わりました。放課後、何人かで車に乗り合わせ唯一伊那市にあるマクドナルドやカラオケに出かけたりもするようになっていました。私が女子だからと遊びに誘わなかったり、気を使ってしまうのではないかと思っていたのが嘘のようです。私の脳みそが少し足りないことを先生方をはじめ、みんなが理解し、一生懸命勉強を教えてくれたり、時には冗談を言い合い笑ったり、体調が悪い時には声をかけてくれて荷物を持ってくれました。また、意見がかみ合わずもめたり、職員室では先生方がいる前で大声で怒鳴り合ったり、オーストリアでは四万円の悲劇にあったり…。たった二年間の林大生活でしたが、本当にたくさんのことを知り、学びました。個性豊かな三十九期生が本当に大好きです。少しの悪ふざけや、馬鹿笑いできなくなること、あの緑豊かな風景を見れる教室の席に座ることがなくなってしまうと考えるとても寂しくなります。それでも、また何日後か、何年後かに全員で再会する時は一人も欠けず、変わらないみんなであってほしいです。この三十九期にいることができて本当に良かったです。こういうふうに考えられるのも先生方や三十九期のみんなのおかげです。本当にありがとうございました。

10月　2学年　架線学実習

林大で学んだこと

2学年
島﨑　公輝

林業大学校に進学して早や二年。この春にはもう卒業を迎えようとしています。

入学当初から希望していた組合に内定をいただき、今はもう春からの新生活に期待を膨らませるばかりです。入学した当時は、林業のことなどほとんど知らず、就職したときに困らない程度の知識がつけばいいと考えていました。しかし林大では林業に関する知識や技術以外にも、人間性や生活面など様々なことを学ぶことができました。特に自分に大きな影響を与えてくれたのは、全員が同じ寮で生活するということでした。学校で共に授業を受ける仲間や、課題や試験で協力する仲間程度だったら、ここまで深い関係にはならなかったでしょう。同じ屋根の下で生活していると、他人の良いところ悪いところ、細かいところまで目につき反発しあうこともあります。お互いが妥協点を見つけて、譲り合って生活する。私は寮生活を通じて少し大人になれたでしょうか。これからの生き方に期待してください。

10月　2学年　森林保護獣害対策学

この学校で

2学年
長谷川力也

私は林大に入る前は特にいい所のないダメな人間でした。中学では勉学にやる気がなく、通知表は二と三の羅列でした。高校もその学力に見合ったところにしか入れませ

んでした。しかし、こんな私でも高校の時「このままではだめだ、成り上がりたい。」と考えました。そこで私は昔から自然に興味があったため、林業の道に進みたいと考え、林大を志望し入学しました。

林大は私が考えられないほどのハイレベルな学校でした。学習面では大学で習うような内容の林学、技術面ではチェンソーの本格的な講習などがありました。また林大の寮は、同じ志を持つ仲間同士で切磋琢磨し、常に自分を向上させていました。

私は林大での勉強の結果、北海道庁に就職が決まりました。昔の自分では考えられないことです。しかし私の成り上がりはここで終わりません。今後も努力しさらなる成り上がりをしていきます。

最後に私は林大のおかげで成長ができました。私はこの林大・先生方・そして仲間に出会えて感謝しております。本当にありがとうございました。

10月　２学年　総合実習（伐倒）

林大生活を振り返って

２学年
山嵜　正寛

時が経つのはあっという間で、林大の卒業式まで数えられる程の日数になってしまいました。日々、残り少ない林大生活を楽しみながら過ごしています。

この二年間は、色々なことを体験し、多くのことを学ぶことが出来ました。この期間で大きく印象に残っているのは、三林大伐木選手権です。皆で色々と意見を出し合い、試行錯誤していく中でどんどん上達していくのは、とても嬉しく楽しい時間でした。一年生も自分達の練習を手伝ってくれるなど林大全体で頑張ることが出来たと感じています。

この林大に入学をさせてくれた両親と共に、勉学や色々な林業技術を教えて頂いた先生方に感謝しています。毎日朝早くからご飯を作ってくれた寮母さん美味しいご飯ありがとう御座いました。最後に色々と迷惑を掛けることの多かった自分を支えてくれた三十九期の皆「二年間とても楽しかったです。ありがとう。」

楽しい二年間

２学年
吉越　一真

私が林業大学校に入ってからの二年間はとても楽しかった。二十年間生きてきた中で確実に一番楽しかった。一学年で十九人という多くはない人数で様々な場所に行った。屋久島から始まって青森、岐阜、オーストリアなど、イベント事だと寮祭、みこしまくり、駅伝、雪灯りなど、多くの行事を一緒に行ってきた。時には喧嘩する事もあったけど、基本的には私は皆が大好きであり、一緒にいてすごく楽しくて、できることならずっと一緒にいたい大切な存在。だけどこの生活もあと少しで終わり。もう少しで皆それぞれの道を歩んで旅立ってしまう。とても悲しい事だけど、私はそれを乗りこえていかなければいけない。悲しみを勇気に、涙を笑顔にかえて、これから訪れる人生という名の長い道を、つき進んでいきたい。

11月　２学年　樹木医学実習

10月　木望祭（寮祭）

保護者のページ

絵の一言

応援しています

内田　富士子

ある日、TSBのゆうがたGet！に林大が映ったと友人が知らせてくれました。この友人は、山の自然に魅了され山登りをしています。昨年春から息子は林大へ。いい学校に入学できたね、と心から喜んでくださいました。私は、入学式に都合で出席できず、初めて学校に行ったのは、生徒主催の木望祭でした。そこでは、さわやかで清々しく気持ちのよい学生の皆さんの姿に心を打たれました。学校生活が楽しいと言う息子の気持ちがわかったような気がします。また信毎新聞に林大生の活躍が掲載され、誇らしくて感動しました。自然豊かな環境の中での学びと寮生活、お世話になっている先生方、寮母さん、地域の方々、共に学ぶ仲間、良き縁に出会い、貴重な体験を積めることに本当に感謝しています。全員が安全優先、無事故、健康で、充実の学生生活を送れますよう応援しています。

初！冒険！

小林　未智子

息子は幼稚園から高校まで徒歩二十分圏内で生活してきました。この生活圏から出ることは人生初の冒険だったと思います。生来、性格はおっとりで消極的、将来についての志望も薄く、今ある状況に何となく満足してしまう様子に、親元から離れて自立する準備の機会を持たせたいと思いましたが、県外に出すには本人の進路希望と共に経済的に難しく、両方を満たせる進学先を探しました。また、知識と共に善い大人に出会い、考え方を学んだり、生き方の参考にしたりする機会も持ってもらいたいと思っていました。林大を知り、毎年オープンスクールに参加する中で、教務の方々の熱意と二年間で成長している学生の様子を直に見ることで、全寮制の良さを感じ、安心して息子を任せられると思いました。推薦入試は落ちましたが、二か月間必死に勉強し、目標に向かう良い経験になったと思います。

もうすぐ一年ですが、様々な体験と学びをさせて頂いています。本当に羨ましい限りです。不安だった寮生活も先輩方のご配慮で慣れ、楽しんでいるようです。アルバイトを社会貢献ととらえる考えも感心しました。ミヤマクワガタの捕獲にも満足気でした。本人の性格や考え方は早々変わるものではありませんが、親元で過ごすより何倍もの人生の学びを得ていると思います。来年度の一年間も楽しみです。

木望祭に行ってみました。

田尻　芳樹

昨年十月七日、林業大学校学生寮祭「木望祭」に初めて行ってきました。各展示コーナー、チェーンソーのデモンストレーション、体験コーナーと、とても充実していたと思います。又生徒の皆さんも（林業に関係あるか分かりませんが）素朴で素直なとても好感の持てる皆さんでした。先生方も生徒の将来について真剣に考えてくださっていることが良く分かり、安心して子供を預けられると思いました。息子からも授業の様子や寮生活の様子をよく聞くのですが、毎日がとても新鮮で実りある学生生活を送っている様子が感じられます。

あと少しで一年生も終わり二年生になり、オーストリア研修に参加をして、あっという間に卒業になると思います。どうか悔いを残さぬよう日々精進して欲しいと思います。

先生方には今後ともよろしくお願いいたします。最後になりますが、来年は美味しいピザ、チーズを早めに行って必ず食べたいと思っています。

10月　ハスクバーナトップガン研修

我が子が林大に入学して

溝口 和美

息子が林業大学校に入学して十ヶ月が経とうとしています。その間に貴重な体験をさせて頂きました。

屋久島への研修は天候にも恵まれ、屋久島の素晴らしい景色、また縄文杉、ウィルソン株での記念撮影、どれも羨ましい限りの光景でした。

また日々の授業では、とても学ぶことが多く、充実した日々を送ってくれているようです。

オープンキャンパスのチェーンソー体験では、一人で丸太を切ることもできなかったのに、冬休み中にはインターンシップへ行き、実践させて頂くまでに成長しました。

長期休暇で帰省するたび、息子が心身ともにひと回りずつ大きくなって行くのを感じます。それは林大の先生方、先輩方、同級生の方のおかげだと思っております。

林大で学べるのはあと一年と少しです。自分を磨き、周囲の人と協調し、さらに大きく立派な男になって帰ってきてくれることを願います。

学べるありがたさ

鷲森 孝弘

息子が中学で進学先の高校を選ぶにあたり、〝木をあつかう仕事に就きたいので、地元の農林高校へ進学したい〟と高校へ進み、入学後に林大を知ってからは迷いもなく林大への進路を考えていました。

それまでは自分の事を自分で決める事が得意ではなかった息子が高校一年から毎年林大のオープンキャンパスに参加し、その想いは受験までゆるぎもしませんでした。

入学してからは、初めて家から離れての生活で不安もありましたが、入寮初日から先輩方の温かい手助けがあり受け継がれてきた林大の校風に不安も消えていきました。

息子自身も日に日になじんでいくのが時折の連絡で感じられ、家で生活していた時よりも自分で考えてこなす事も増えている事に成長を感じて林大、息子の生活に関わって下さる方すべてに感謝の思いで一杯の今日です。

人々が温かい木曽福島

石澤 聖子

「何か困ったことがあったら、いつでもおばさんのところにおいで」。木曽福島の宿、「むらちや」のおかみさんが入寮する日の朝に息子にかけてくれた言葉である。

お世辞にもしっかり者とは言えない息子が初めて親元を離れて生活する。親の私も不安でいっぱいだった入寮日の朝のこの言葉はとても心強かった。

息子を寮に遣った後、もう一泊むらちやに滞在する予定だった私は不慣れな土地での息子の新しい生活に依然不安を抱きつつ、木曽福島を散策した。通学中の小学生や中学生が皆「おはようございます」と元気よく挨拶してくれる。開田高原に行ってみようと思いバス停で待っていると、同じくバス待ちの女性が「どこまで行くんですか？」と声を掛けてくれ、乗るべきバスを教えてくれる。

木曽福島の人たちは子供から大人までみんな礼儀正しく親切だった。ここならきっと大丈夫だ。私は少し安心して千葉に帰ることができた。

木曽氏の山城

越 隆男

山城は日本全国にあり鎌倉時代から戦国時代のものがほとんどだ。山城は小高い丘、今は畑になっている所、かなり高い山奥などで大がかりな石垣はなく土止め程度の石積み、堀といっても空堀で水はない、当然建物などはない。雑木やヤブの中に遺跡として残っている。春、山菜採りに行った時、偶然立て看板や説明板があると帰宅後すぐ地図で調べたくなる。長野県内に「木曽」という名の山城がかなり多くある。下諏訪の宮坂先生の研究によると木曽殿城、木曽殿屋敷、木曽の城、木曽殿館などだ。当然木曽地方に多いのだが遠く離れた長野県北部の長野市、須坂市、高山村、野沢温泉村にまである。何のために、目的は？ほとんど地元の豪族の所領と生活を守るためのもので「木曽」と名のつくものは義仲挙兵時のもの、その後子孫が守りぬいたものや武田家家屋となったものだろうと思う。山に入った時不自然な地形があったら疑ってみよう。

林大での経験を活かして

髙山　隆

人生の中で、二年という時間は決して長いものではありませんが、林大での経験はとても濃密なものだったと思います。日々学んだ事は元より、日本伐木チャンピオンシップに参加させて頂いたという貴重な経験は、息子が将来自分の進むべき道を見つけるきっかけになった事と思います。寮生活を通して、苦しい事も楽しい事も分かち合える、良き仲間に出会えた事はかけがえのない財産になるでしょう。これから社会人として働いていく中で、努力しても報われない事の方が多いのかもしれません。でも無駄な努力は決して無いと思います。林大で手にした大切な財産と、ご指導くださった先生方、日々の生活を支援して頂いた学校関係者の皆様、そして林大生を温かく迎えてくださった地域の皆さんへの感謝の心を忘れず、社会に貢献できる人に成長してほしいと思います。今、最も可能性に満ちあふれている時期です。夢に向かって、悔いのない人生を歩んでほしいと願っています。

次世代の担い手として

藤原　正志

卒業まで残すところ僅かになりました。

二年前彼の将来の進路について、林業・木材産業が選択肢の一つにあることを知りました。ならばと、林大へ進学を勧め今日に至っております。

私は、小規模ながら林業を生業とする会社を経営しています。林業の現場やその経営に携わっている方々の多くは、現場での実践作業の中から育林技術や搬出技術を習得し体で覚えてきていることでしょう。しかし、林業先進国の多くは次世代の若者に林業の本質とその基礎的なことを教育する重要性を重んじています。私は、その教育の差が今日の日本の林業と林業先進国との差ではないかと考えております。これからの日本の林業を担っていく若者にこそ基本的な林学を学べる環境と教育機関の有無が重要です。

もちろん現場での経験値も重要ですが、本質的な林業の知識は専門的な先生方や経験豊かな方々からの教えを乞わなければなりません。林業は百年先を見据えた唯一の生業です。今後彼は、林業・木材産業に携わっていき、林業先進国と肩を並べるよう新たな発想や様々な技術を考案し、それらを地域に密着させた林業・木材産業として社会に貢献できる人に成長していくことでしょう。将来は、林業哲学を持ち、自分の行ったことを適切に説明できる林業家を目指してもらいたいと思います。

この林大で同じ道を進むべき仲間と学べたことは、彼にとって一生の財産であり、これから仲間と共に次世代に向けた林業を考えていただくことを所望します。

最後に、ご指導いただいた先生方や地域の方々に感謝申し上げます。

11月 ３林大交流伐木選手権大会

ありがとうございました

横井　博士

東京の割烹でアルバイトしていた息子から林業大学校に進学したいという話を聞いた時は、いい進路を選んだなというのが第一印象でした。元々は宇宙系や海洋系の進路を目指していた事もあり、より身近な自然を相手に本人がやりたい事を見つけたのは親としても嬉しかったです。また、林業は人間の役目をＡＩでは取って代われない領域であり、学んだ事が長く役に立つだろうと安心した部分もあります。寮生活で先生方や周りの先輩後輩に迷惑をかけてないかとか、一人でちゃんとやっていけるか、身体壊してないか等親としての心配は尽きませんでしたが、先生や学生の皆さんのお陰で、また地域の方々にも温かく受け入れていただき、卒業・就職を無事迎えられそうです。入学式や木望祭で木曽を訪ねた際も、人生の大事な時期を素敵な場所で全人教育のもと過ごせて良かったと感じました。残り少しの期間ですが、引き続きよろしくお願いいたします。

思い起こせば…

長野県林業総合センター
指導部　林業専門技術員
百瀬　浩行
（第８期生）

林業大学校四十周年おめでとうございます。

となると気付けば私が卒業して三十年近くたち、卒業生も約七百名となるのですね。年々月日が経つ速さをしくしくと感じております。

さて、林大生の皆さんへ一言とおおせつかり、昭和六十年代を振り返ってみました。

私の実家は林家でもなければ、高校も林業とは無関係で、ほとんど知識のないところから林大に入りました。森林学や林業技術は「へー」「ホォー」と知らなかったことを学べたことは、それなりに楽しく学校生活を送っていました。しかし、「学んでいる最中、知らないのだからしょうがない」が通用するのは学生まで、世間の目も「学生だから」という目で見てくれていたと思います。卒業後、県の職員となり一般の方、林家の方、林業事業体、市町村の方と接することとなると世界は一変。林大では聞いたことのない単語（忘れただけ？）が飛び交い、それが分からずストレス。「林大出ているのに知らないの？」の一言でストレス。そうすると自信を持って話せないことに更にストレス。とにかく最初のころ、また新たな係に異動したときは、そのストレスと闘いながら仕事をしていました。

林大で二年間学び、それがすぐに仕事に役立つもの、また記憶にしっかり残るのはほんの少し、そもそも教わったもの全部覚えられるものではありませんし…。

そんな中、一つのことを強く感じました。それは「なにか一つ自分の強みを持つこと」でした。社会に出ればどんな分野でもそれに精通した人が必ずいます。その方達の発する言葉には自信と重みがあり、聞いている人を「へー」「ホォー」と納得させ、他のことでも「この人が言うのなら」と信用させられます。樹木の名前でもいい。チェーンソーの取り扱いでもいい、何か自分の興味あるものを突き詰め勉強し、自信が持てる強みとしてみてください。きっと社会に出て役に立つことになると思います。

そう言う私もまだまだ強みを磨いている最中です。それは……話が長くなりますのでまたどこかで。

檜のアドバイス

創立四十周年と次の十年と学生達

参事兼教授
武田　雅宏

「私は、平成十八年十一月一日付けで参事兼林業大学校教授として赴任しました武田雅宏です。担当は、新教育課程：簡単に言えば、林業大学校をより魅力的にするための新たなカリキュラムの編成やホームページの編集といった、林業大学校の改革に関する仕事を担当しています。…」とのプロローグで「檜のアドバイス」に寄稿デビューしてから、今回二回目となる平成二十八年度からの林大への赴任。そして三年が経過しようとしている。

思えば十年前、林業離れが進み、学生が思うように集まらず定員が半数となる危機的状況のなか、林業大学校運営協議会の委員の方々との活発な論議を経て、定員確保を必須とした「林業大学校改革事業」を起こし、学生の全国募集展開、募集パンフ・ホームページの刷新、シラバス、インターンシップの導入、二二二haの三岳演習林設置、二学年の北海道研修を海外研修（一回目は西アメリカ：セコイア国立公園・ヨセミテ国立公園他）に変換など矢継ぎ早に実施した思い出は今も鮮烈に残っている。

再びこの林大へ戻ってきて、全国に二十校を超える林業大学校が設立されるなか、唯一二倍近い競争倍率を誇る人気校に長野林大が育っていることは大変に嬉しく感じる。

さて肝心の学生であるが、今、創立四十周年目の卒業生三十九期生が自らの進路を決め、卒業まで後一か月を切って一日一日を大切に過ごそうとしている姿を愛おしく見ながらこの原稿を書いている。

彼らには、入学当初から、これまでの延長線上にない、五十周年までの、次の十年間の参考となる試みをとリクエストし続けてきた。

その期待に応え、自主研究、企業連携講義、学生主体の地域振興イベント等新たな試みを苦労しながらもクリアし、ＪＬＣ（日本伐木チャンピオンシップ）ジュニア部門二・三位入賞、全国林業大学校対抗伐木選手権大会優勝など目を見張る成果を挙げてくれたことに感謝している。このことは、現一年生を始め、次の十年間に向けた大きなプレゼントになったことと思う。

林大生の大きな強みは、全寮制により培われる良い意味での「縦の繋がり」である。林大は、この三月の卒業式で七一八名を送り出す。県内でいえば森林・林業関係の組織で林大生のいない所は「無い」と言っても過言ではない。

社会に出たら、林大の二年間で培った成功体験とこの「縦の繋がり」を十分活用し大活躍して欲しい。

林大創立40周年：平成30年度に「頑張った」取組
「林大２学年が林大講師・県内林業家・企業との連携により勝ち取った JLC：日本伐木チャンピオンシップと全国林業大学校伐木選手権大会」での成果

平成30年（2018年）５月に青森県で開催された日本伐木チャンピオンシップ（以下ＪＬＣと表記）と、11月に行われた全国林業大学校伐木選手権大会への参加を通じ、学生と木曽町他・下伊那地域の林業家・上小地域の林業家・林大教務スタッフ・大学講師・林務部OB職員・信州大学教務スタッフ陣が「自分の得意技」を持ち寄って講師となり、学生と一体となって技術を向上させる取り組みを行いました。

その結果、学生達は驚異的なやる気と向上心とチームワークを発揮し、安全動作と正確なチェンソーワーク・目立て技術などを取得し、ＪＬＣジュニア部門全国２・３位（２学年　髙山　亮介・山嵜　正寛)、全国林業大学校伐木選手権総合優勝という成果を挙げました。その取り組みと成果は以下の通りです。

●2018. 5　　ＪＬＣジュニア部門全国２・３位

時間外も休日も教務スタッフが付き添いながら、練習器具は２学年の仲間で制作して頑張りました！

青森県に遠征して歴代の伐木チャンピオンに教わった学生が講師となり他の学生とともに自主練習し、技を競い合う講義スタイルが定着！また、チェンソーの歯の特殊な仕様など地元の企業も応援！映像による動きの分析など林大外部講師の東大研究員の協力も得てオール林大体制で応援しました！

大会には、２学年全員と１学年有志がバス内２泊で、林大旗を持って応援！地元メディアも大きく取り上げました。

優勝は岡山の林業家、
２・3位を長野林大独占（右２名）

青森会場には2学年全員が
バス泊で応援に！

練習機材も学生が自力組み立て！

●2018. 11　　全国林業大学校伐木選手権　総合優勝

京都・岐阜・長野の３林大により開催されている全国林業大学校伐木選手権は５回目を数え、３林大の学生の技術レベルは大きく向上し、学生の大会優勝に寄せる想いも大きなものがあります。

「日本一の林業大学校」を目指そうという想いを共有した林大関係者と学生が、ハスクバーナ・地元森林組合・地元企業・県内林業者有志・林大OBから自分の得意技を講義する特別講義などの協力を得て、教務スタッフが「さあ、やろう！」でなく「暗いから、もう止めよう！」が合言葉の猛練習の末、総合優勝を勝ち取り大きな感動を１学年に与えました。１学年は大会直後から、放課後に２学年の指導を受けながらチェンソー技術の練習を開始！林大の良き伝統が始まりました!!!

優勝斧を抱いて３林大の真ん中に！

先生も学生も一緒に気合入れ！

学生の自主学習は暗くなるまで続いた！